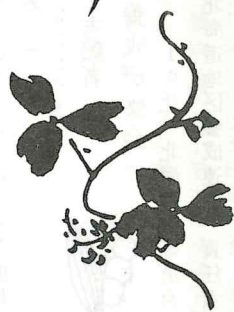


仙台司教区

教区事務所だより



(第 47 号)
昭和56年9月15日

教皇さま ご来訪にこたえて

私たちに出来ることは何か？

教皇さまが日本を訪問してから半年になろうとしている。ふるえるほど寒かった野外ミサの記憶は遠いことのようにも思えるが、教皇さまの力づよいお声、お姿はいまも鮮やかに心に残っている。教皇さまがわざわざおいでになるといふ歴史的な体験をした日本の教会。これを機会に大きく発展することが課題として残されることになった。具体的には、数々のすばらしい言動で、教皇さまが私たち日本の教会の信者に模範を示し期待されたことを、どのように実現するかということだろう。一九八〇年代の日本教会のメイン・テーマといっている。

ところでこの半年間、教会にどのような動きが見られただろうか。司教団からは教皇さまの平和アピールにこたえる信徒のための小文が発表された。しかし今のところは教皇さまのメッセージ理解の勉強がなされている段階で、まだ表立った動きはない。いくつかの教区、そ

して小教区教会やその他のグループで取りあげられようとしているだけだ。あれほどの感動をもって受けとめたにしては、少し反応とあゆみが遅いという気がしないではない。準備段階にあるともいえるが、やはり特別の機会を作って強力に進めなければ、なにも生まれないのではなからうか。わが仙台教区としても、いまとくに目立つた動きはみられない。

教区あるいは組織としての実践には準備や時間がかかるかも知れないが、教会を支えるもうひとつの機能である私たち信者の一人ひとりに、いますぐにでも実行できるものがありそうだと。そのいくつかを考えてみよう。

①教皇さまが日本で話されたお話しの内容をよく読んで理解すること。中央出版社から「教皇ヨハネ・パウロ二世訪日公式メッセージ」という小冊子が八百五十円で発売されている。高校生以上の信者は必ず買って一冊もつようにしてほしい。

②教皇さまの話の中から特に具体的なもの（例えば家庭教会、召命促進、教理の勉強など）を取り上げ、それについて何が出来るかを考え、決めたら実行する。

③何人かのひとと一緒に考えたり（家庭やグループなどで）、話し合ったりすることはさらにすばらしい。そこから小教区、あるいは教区全体のものとなるよう働きかける。

以上はすでに実行しているひとともいえるがこれを起点として次々に多くのことが考えられるだろう。とくに教会の若い方々に、よく呼びかけたい。

September

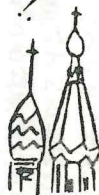
司教様の日程

(8月25日現在)



- 9月3日 宗教法人責任役員会(仙台)
- 7日 教区司祭団役員会(仙台)
- 8〜9日 宮城県宗教法人連絡協議会研修会(当別・トラビスト)
- 10日 山目修道院新築祝別式(一関)
- 15日 福島県カトリックの集い(小名浜)
- 17日 社会福祉法人理事会(仙台)
- 20日 白菊学園五十周年記念式典(八戸)
- 23日 司牧評議会(仙台)
- 27日 青森県信徒大会(明の星高校)
- 28日 邦人司祭月例会(仙台)
- 10月2〜3日 神学校常任委員会(東京)
- 5日 教区司祭団役員会
- 9日 宮宗法連研修会
- 10日 ドミニコ女子修道会来日五十周年記念式典(仙台)

教皇様 無事退院



9月末まで静養ノ。5月13日午後5時、聖ペトロ広場での一般謁見の時、若い男に狙撃されて重傷を負い、直ちにジェメリ病院に入院された教皇ヨハネ・パウロ二世は、8月5日二度目の手術を受けられ、その後経過良好で8月14日無事退院された。ジェメリ病院の医師団は、今後病院での治療は必要としないが、あと一か月半の静養が必要であると発表した。

教皇は退院後まずバチカンの聖ペトロ大聖堂の地下の聖ペトロの墓前で約5分間祈られ続いてヨハネ23世、パウロ6世、ヨハネ・パウロ一世教皇の墓前で短い祈りを献げられ、その後出迎えの人々三百人の前で挨拶、元氣な御様子で関係者をほつとさせた。8月16日からカステルガンドルフォで静養のため居を移したが、当地では、日曜の正午のアンジェラスとそれに先立つ短い話は欠かさずされる予定で、訪問者を喜ばせている。

教皇様が一日も早く健康を回復し、二度とあの様な危険に出会わない様に、聖母マリアの特別な御保護を祈り続けたいものである。

第十回 宮城県信徒大会

中・高生 がんばる



7月5日(日)第十回宮城県信徒大会が、仙台白百合学園で行われた。今年是小学生以下を教会学校教師会が担当し、中学生以上を大人

の部として二つのグループに分かれて行われた。

大人の部は、すでにカトリック新聞に報告されているが、今年には中高生が話題提供者として発表。内外から反響を呼んだ。特に仙塩地区中学生会がまとめたアンケートを中心にした発表は参加者の関心を引き、中学生の友情、学校生活、家庭生活、そして信仰について考えさせられる点が多かった。この信徒大会の後、各家庭でどの様な話し合いがなされたか、又、家庭に、どの様な変化があったか興味あるところである。又、母親の立場から、教師の立場からも話題提供があり、お互いに考えさせられたのではないだろうか。

子供の部は幼児も入れて17名リーダー39名という大世帯、4月から数回の準備会を重ね、教師会初めての経験であったが、各教会学校の合同集会という要素も強く、熱気ある子ども大会となった。子どもの部のリーダーは大部分が大学生と若い人々で、大人の部の内容を聞く事ができなかったのは残念であったが、子ども達も信徒の一人としての自覚を持って信徒大会をしているという意識を盛り上げ、大人の方々にも「子守り」という意識を取り去っていたらどうだろうかというのが来年度に向けての希望であった。

.....
修練者・志願者

合同養成研修会

一東北・北海道五修道会

東北・北海道地区養成連盟(責任者ウルスラ修道会、オタワ愛徳修道会)主催の研修会



が、6月30日から7月5日の6日間北海道当別の厳律シトー会灯台の聖母修道院で、五修道会二十人が参加し、高橋重幸神父(厳律シトー会)の指導のもとに「賛美と感謝の詩編」のテーマで行われた。最近各修道会とも志願者が少なくなっている折から、各会の修練・志願者が一堂に集まって行い研修は意義深いものであった。

また、トラピスト会員達の聖務に共にあずかり祈ったことは、非常に強く印象に残り、修道生活の真髄に触れた感じがしたとの参加者の声があった。なお東北、北海道に養成機関を持つ修道会は、観想会を別にして次の五修道会である。

聖母被昇天会、聖ウルスラ、オタワ愛徳、聖ベネディクト、殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ、の各修道会。

三教会合同運動会

△青森市V



7月5日(日)青森市内の本町、浪打、篠田、三教会対抗運動会が明の星高校の体育館で行われた。あいにくの雨であったが、老若男女三百人が集まり、玉入れ、綱引き、リレー、晩酌釣り、風船割り、三人四脚、借り物競走、徒競走等、屋内でも出来る趣向をこらしたゲームを楽しんだ。昼食をはさんでの奮闘三時間の末、優勝は篠田教会、二位浪打、三位本町となり、お互いの健闘を祝して拍手が広い館内に響き渡った。十四目を迎える来年も又、頑張ろうと、お互いに約束して散会した。

祝 創立二十五周年

△仙台・一本杉教会▽

去る7月12日(日)仙台・一本杉カトリック教会(主任代理・ラシャベル神父)では、創立25周年を祝い記念ミサと祝賀会が行われた。

ミサは、仙台司教区総代理・三浦平三神父司式で、ケベック外国宣教会管区長モリス・ラベ神父、一本杉教会出身で現在気仙沼教会主任の土井勝吾神父、そして一本杉教会のラシャベル神父の共同ミサで行われた。

当教会は、初代のフォーレ神父の時から、町内の種々の行事にも使われており、祝賀会には、一本杉町内会の人たちも参加して、和やかなひとときを過ごした。

国際障害者年に当たり
厚生大臣から 感謝状

岩田寅松氏(八木山教会)



仙台・八木山教会の岩田寅松氏(西多賀ワ
イクキャンパス・常務理事)は、去る5月26
日、国際障害者年を記念して厚生大臣から感
謝状を受けた。

西多賀ワイクキャンパスには、重度身障者
収容授産施設、身体障害者福祉工場(萩の郷
工場)、身体障害者療護施設萩の郷福寿苑、
第二福寿苑があり、岩田氏は社会福祉法人共
生福祉会・会長福島禎蔵氏を助けて、これら
の施設作りに尽力、日夜身障者のために働い
ておられる事が認められ、表彰された。

福 島

●夏期学校で難民慰問

7月30日から3日間、平、小名浜、勿
来三教会合同の小学生の夏期学校が例年
どおり五浦ドミニコの家で開かれた。丁度小
名浜港に上陸したベトナムの難民の方々が病
院に収容されている、とモレン神父から聞い
た子ども達は、自発的にオヤツを辞退し、
お小遣いを出し合い、子ども慰問団を結
成し難民の方々を訪問、とても喜ばれた。
浜通りの子ども達にとっても、今までに
なく印象深い夏期学校となり、難民の方
のために真剣に祈ることができ、素晴ら
しい体験となった。

宮 城

●愛子ドミニコ会生活寮大繁盛

仙台からバスで一時間、広い田園
の中にあるドミニコ会天使園の生活
寮は、今年仙台市内の子供達でにぎわっ
た。合宿用の設備が整って利用しやすい
という事で市内4教会の日曜学校が次々
にキャンプを楽しんだ。

●仙南地区4教会合同で夏期学校

昨年、愛子の生活寮で2教会合同でキ
ャンプを愛好評だった畳屋丁、一本杉の
日曜学校では、今年は巨理、角田にも呼び
かけ、角田カトリック幼稚園を会場に二泊
三日の夏期学校をした。児童50名リーダー10
名で初めての出会いが大部分だったが、すぐ
仲良しになり、小さな教会同志がまとまって
行事をする事の良さを今年も味わい、来年も
またノと、リーダー一同気を良くしている。

●宮城県中学生会合宿 岩手県青年の家で



昨年、初めて宮城県の中学生在一堂に集ま
り合宿をしたが、今年は「つながり」という
テーマで第二回目の合宿が8月4日から7日
まで行われた。スポーツ、ゲーム、劇など盛
り沢山のプログラムを元気にこなし、「スゴ
ク楽しかった」とは初参加の中一A君の感
想である。参加者は中学生50名リーダー
15名であった。

岩 手

●高校生、身体障害者年を考える
岩手県の高校生20名は、花巻カト
リック教会を会場に、「身体障害者
年を考える/高校生に何が出来るか!!」
をテーマに二泊三日の合宿を行った。指
導は、パウマン・マルコ両神父、板垣神
学生、食事作りは婦人会の方々に応援し
てもらい、有意義な三日間であった。特
に合宿の前に、各教会でボランティアの
体験をして来るといふ宿題は非常に良い
体験となったと報告された。

青 森

●大清水ホームで高校生合宿

ボランティアを通して信仰生活を
見なおそう/とのテーマで青森の高
校生30名が老人ホームである大清水ホ
ムに集合。一人の高校生が、二、三人の
老人を担当し、話し相手になりながら、
自分の信仰生活について考えた。他に作業奉
仕として、掃除、じゅうたん洗、洗たく、
食事作り、夜は、ぼん踊り等で親しくなつた
老人達と楽しく過ごし、皆別れがたい思いで
帰路についた。

「高齢者は教会の宝……」

（教皇ヨハネ・パウロ二世の説教より）

私は、高齢者の皆さんに深い愛と尊敬の心を表わすと同時に、多くの方々にも同じことをして下さるようお願いします。

老年とは人生の冠のようなもの、収穫の時だと言えます。今までに学び、経験したこと、今まで行い、やりとげたこと、今まで苦しみ耐えてきたことを刈り入れる時なのです。

偉大な交響楽のフィナーレのように、生涯のすべての旋律が組み合わさって力強く調和のとれた楽の音を奏でます。そしてこの調和から知恵が生まれます。：「老人に知恵があり、この世の指導者に熟慮と諫めとがあるのはいいことだ。老人の栄冠は豊かな経験であり、その誇りは主への畏れである。」（集会の書25・5） 知恵があると物事を少し離れた所から見る事ができます。しかし遠ざかってこの世を上から見下ろすのではありません。物事を蔑視するのではなく越えるのです。この世を神の目と神の心で見るようになります。自分の能力の限界や失望、怠り、罪を含む過去をすべて神と共に受け入れることができるようになるのです。：

高齢者の皆さん、皆さんは教会の宝です。この世の祝福なのです。：いかに巧みに国や家族の歴史や民話を若い人たちにお伝えになることでしょう。皆さん方は本当に上手に若

者たちを信仰の世界に導き入れることもできるのです。成人したばかりの若者は、悩みごとのある時、親の世代の人々のところよりも皆さん方のところに来るでしょう。：色々な会合や団体に参加し良い助言を与え、教会や公共の諸活動に協力することもできるのです。私達は、木々は莊厳といえる程輝く収穫の季節に在るわけですが、この季節はまた枝が葉を落とし、葉は朽ち果てる時でもあります。

同じように老年も力強く最後の和音が鳴り響く時であり、生涯の和声的な総括の時であるだけでなく、消えゆく時でもあります。周囲が見なれないものと映るようになり、生きることも重荷と感じられ体も痛んできます。ここで私は、「自分の尊厳を自覚してください」という呼びかけに加えて次の様に申し上げます。

「自分の重荷を受け入れて下さい」

主イエスは、御自分の苦しみで人々の苦しみをあがなわれました。皆さまは、御自分の苦しみで主の救いのみ業に協力するのです。

皆さんの苦しみを主の抱擁と考えて下さい。苦しみを、御父から受ける祝福と思つて下さい。御父は、測り知れないけれども疑う余地のない知恵と愛でもつてこの苦しみを、皆さんの方を完全にして下さるのです。泥金から金を取り出すのは炉の中です。（ペトロ前1・7） ぶどうがぶどう酒に変わるの、圧搾機を通つてからなのです。



カトリック信者であったり、旧軍人家族のため、ベトナムの現政権に圧迫され生活できなくなったベトナムの男女（子どもも含む）40数名が4月初旬、祖国脱出を決行した。脱出のため船は9m X 3mのジャンク。しかし出航後間もなくエンジンが故障し動かなくなり、南シナ海の漂流が始まった。15日目に食糧は尽き、その後時折見舞うスコールが命の綱、更に危機が見舞つたのは、船に浸水が起り、男子は昼夜の別なく排水作業に努め、辛うじて沈没を免れていた。しかし飢えと暑熱、その上この重労働が重なり、働き手は次々と倒れ、十数名の犠牲者が出た。

「その人達はどうしましたか？」の問いに、「サメの食べ物になりました」と中年の婦人は寂しそうに答えてくれた。漂流中何隻かの船に出会ったがいつも無視され、44日目によりやくギリシャ船に救助され、福島県の小名浜港にたどり着いた。上陸した時は総勢25名、男子は5名だけであった。この弱い婦女子が助かつたのは男達が己を犠牲にして彼らを守つたからである。ある父親は死の直前妻と子呼び、「希望を持って、いつも主とマリア様が見守つて下さるから」と言い残して息を引きとつたという。日本にいる難民の方々皆このような苦しみを体験している。このよう不幸が、この世界にあつてよいものだろうか。この現実を前にして、私達は一体、何ができるのだろうか。（古田繁男）

読者のべえじ

ポーランドを

旅して (下)

小名浜 佐藤 テツ



作曲家ショパンは、フランス人を父にポーランド人を母として生まれ、その少年時代をポーランドで暮らし、ピアノの勉強に専念しました。ポーランドではこれ以上ショパンにピアノを教える教師はいないという事で、パリに出てピアノの勉強に励み、やがて数々の名曲を作曲し、ヨーロッパの各地で音楽活動を続けましたが若くして肺結核に侵され、そのために若い生涯をフランスで終えたのです。

しかし彼は祖国ポーランドを常に愛し、死後自分の心臓はポーランドに送ってほしいと遺言を残し亡くなったそうです。その言葉どおり、心臓は死後ポーランドに送られ、ワルシャワ市内の大きい教会内の中心部の地下に埋葬され、その真上の円柱には、ショパンの胸像が安置されて、永久に記念されています。ワルシャワの市内の広々とした公園は、森に囲まれ、その中心部には池があり、噴水が水を噴き上げ、池の正面にはショパンのポーズのある像が安置されています。ベンチが池の周りに沢山置かれていて、咲きほこるバラの花に埋もれて、人々が腰を下ろし、ショパンの名曲に耳を傾けている様子は、実に素晴らしい光景です。

ポーランドのだけれども、ショパンを愛し、誇りとしています。又、ワルシャワ郊外のショパン生誕の家も、そのまま保存され、五年に一度、ショパン愛好ピアノリストのコンクールが行われ、腕を競います。日本からも遠藤郁子、田中希代子、中村絃子等が参加し、腕を競い入賞しています。ショパン愛好家のピアノリストはこの家を訪れてピアノを弾き、この地を訪れる観光客は庭のベンチに腰を下ろして、美しく咲きほこる花々をながめながら、ピアノの音に耳を傾けます。

何とゆとりと落ち着きのある国なのでしょうか。経済力が弱くても富がなくても、自分の信仰に生きている人々の雰囲気、ローマ法王を生み、ショパンを生み、後世に誇りを残して生活を維持しているのだと思います。

この春来日したワレサ議長は、「日本は、私の恋人です。日本のすべてが欲しい」とほめたええました。確かにポーランドから見たら日本は機械工業、経済力に於ては先進国であり、ポーランドは後進国でしょう。しかし精神生活面では、日本などは遠く及ばない先進国ではないでしょうか。

伝統的な信仰と豊かな芸術性、人を愛する心が一体となつて、法王、ショパン、ワレサ、アウシュビッツのコレベ神父、八方破れの奉仕者ゼノ修士を生み、育て、その業績はポーランド人のみならず、日本人の心の中にも永く残る事でしょう。これを育んだものは、彼の国の美しい自然と、深い精神性であると、私には強く感じられました。

一信徒の思うこと

泉市将監

山浦 金子



「聖書と典礼」今年の7月12日号年間第15主日の最後の頁の「ミサの予習」という記事を拝見しましたが、大変よい事と思います。

しかし私共は、日曜のミサの始まる直前でなければ、「聖書と典礼」を手にする事ができません。少し遅れると、もう一枚も残っていないこともあります。

実は、私は数年前、東京の一信徒の方と旅行をしました。その時その知人は、「聖書と典礼」を一か月分まとめて一冊にとじたものを持つておられました。そして土曜日には、翌日の部を開いて読んでいるのです。私は羨ましく思い眺めておりましたら、

「あなたの教会にはないのですか。私達の教会では一か月分まとめてとじて、信者に分けて下します。ハンドバッグに入れて、どこへでも持つてゆけます」との事でした。

又同じ頃、東京のある病人は、「日曜のミサに行けないので、これを読んでいると靈的にミサに与っているような気分です」とおっしゃっていました。

私達が毎年手にする教会の典礼暦と同様に「聖書と典礼」も一か月分まとめたものを配布して頂けましたら、「ミサの予習」もラクになり、又、色々な理由で日曜のミサに出られない時などの靈的糧ともなると思うのですが、如何なものでしょうか。

おらが教会 (11)

福島
湯本教会



温泉と炭鉱の街として全国に知られた湯本に、おらが教会があります。

湯本教会は、昭和28年6月、小名浜教会の巡回教会として、ドミニコ会ダビオ神父により建てられました。ロザリオの聖母を保護の聖人に戴き、浦川司教を迎え祝別、続いて公民館で地方名士を招待し盛大に祝賀会が行われました。

その時から、主任司祭も創立者ダビオ神父、増田道夫、ラマル、ラボルト、そして現在のラローズの各神父に引き継がれ、早や28年の歳月が過ぎております。

特に現主任司祭のラローズ神父は、ドミニコ会司祭の長老で、会津若松、福島大町、大河原、郡山等、仙台教区の諸教会で司牧され、熱烈な信仰と荘重な説教で多くの人々を導いておられます。今年に司祭叙階50年、満77歳の喜寿、そして来日50年の三重の祝いが重なり、去る7月19日午前11時から感謝のミサと祝賀会が盛大に行われました(詳細はカトリック新聞8月16日号参照)。この慶事は、おら

が湯本教会の今年最大の出来事でありました。ミサはドミニコ会管区長・A.ポリーニ師を初め、師弟の間柄にある仙台教区の児山六七男、深沢守三の両邦人神父、そしてドミニコ会神父等7名の共同司式で行われ、ひたすら神の愛を説き続けた50年に参列者一同深い感動の面持ちでありました。

さて、湯本教会の信徒数は統計上では74名ですが、主日のミサ出席はその1/3位です。炭鉱の盛んな時は、教区内でも年間52名の受洗者を出し、第二位になったこともあり、浜通り教会の中では、附属幼稚園のない唯一の教会であるため、教会維持のため、少ない信徒でよく協力しています。

信徒会(ロザリオ会)は、聖堂の大掃除、大祝日の行事、親睦会等を主催しています。SVP会は、愛の実行運動として、教会開設と同時に始まり、信徒、並びに市内賛同者の協力により、毎年降誕祭を中心に、年間を通じて市内の恵まれない方々の援助活動を通じて、地区民から感謝されておりますが、県の福祉協議会長からも表彰された事があります。

いわき市には、平、湯本、小名浜、勿来と四つの教会がありますが、この四つを結ぶ信徒連絡協議会を持ち、会長・古田繁男氏を中心に、研修、親睦と小教区の連携による共同事業等、各方面で活動しています。特に今年には「福島県カトリックの集い」が浜通り地区の担当なので、その開催準備のため、実行委員会を設けて、協力して良い「集い」にしようと張り切っています。(伝道士・横尾重信)

お知らせ

司教区事務所の郵便振替口座番号の一部変更

仙台司教区事務所の郵便振替は、諸献金、寄付金等の納付のため広く利用されていますが、仙台地方貯金局の機械処理導入に伴って口座番号が一部変更されることになりました。貯金局の機械処理の実施は昭和57年10月頃からです、当分の間は旧番号を使用することもできますが新番号を使用する場合は、左記のように訂正して使用して下さい。

変更される口座番号

加入者名	口座番号	
	変更前	変更後
カトリック仙台司教区事務所	仙台 2305	仙台6-2305
仙台司教区一粒会	仙台 262	仙台1-262
高齢司祭厚生福祉基金	仙台 4356	仙台0-4356
教区立幼援助基金	仙台 8606	仙台2-860

新番号使用に際して、旧払込用紙を使用する場合は、送り先貯金局名欄にチェックデジット(口座番号前に、新たに決められた1ケタの数字)を記入する。

例

口座番号	仙台 6	十	万	千	百	十	番
				2	3	0	5

仙台司教区事務所だより47号
昭和五十六年九月十五日発行
発行所 仙台司教区事務所
仙台市本町一丁目2番12号
TEL 0222 22 7371